

しあさってにね

著 者 伊川清三

イラスト 名無しさん

しあさつてにね

伊川清三

構内は浮ついていた。

それもそのはずである。四月の大学は新入生で溢れ返るから当然である。通りではフォークソング部が新歓ライブと称して演奏をしていた。

その通りにある立て看板は色彩豊かという表現がびったりであった。

「新入部員募集！ 未経験者大歓迎」「73年度前期学生大会」「春季定期演奏会のお報せ」……。

私はやや躊躇いがちに立ち止まった。隣を数人の学生が通り過ぎる。

同じ新入生同士だろうか。ぎこちないながらも楽し気に会話している。

ふと、周りを見ると、同期と思しき人間は既に気の合う同士を見つけているようであった。そのような集団に入られていないのは自分だけ。

そつと溜息をついた。

今になって、ここに入学したことを後悔した。周りの人間から発せられる雰囲気と自分の雰囲気はどことなく違う。やはり、大学のカラーと自分のカラーにはずれがあるようにも思えてきた。

頭を振った。今更、悔んでも仕方がない。

私はやや重い足取りで講義室に向かった。

午後一の大講義室。一般教養。指定テキストの著者は担当教官。マイクを使った典型的なマスプロ授業……。

同じようにグループができていく。居心地が悪かった。

空いている席に端の坐る。

授業が始まるまで数分。その数分の居心地がとてつもなく悪く、妙に

長く感ぜられる。

買ったばかりのテキストをばらばらとめくっていると、

「あのう、済みません、隣いいでしょうか……」

不意に声を掛けられて、私は思わず振り向いた。

声を掛けてきた女性と目が合う。おずおずとした印象であつて、どことなく不安げな表情を湛えている。

「あ、どうぞ」

間抜け返事。彼女はべこりと一礼して、控えめに隣に坐った。

私は彼女を瞥見した。彼女は手持無沙汰なのかテキストを適当に広げ始めていた。そして、再び目が合った。慌てて逸らす暇もなかった。

「あのう、お名前なんですか」

「高町由香里です」

「高町さんですか。私、近藤七海と言います」

そこで沈黙がわづかに漂った。私は咄嗟に、

「えつと、近藤さんの出身はどちらですか」

「出身ですか——秦野はだのです、小田原の隣です」

「神奈川なんですか、結構遠いんですね」

「自宅通学できなくもないんですが、女子寮に入っているんですよ」

「寮か、いいなあ」

「そうでもないですよ——」

大学に入ってから、まともな会話をしたのはこれが初めてなよう気がする。他愛のない話に花を咲かせていると、チャイムが鳴り、教授が入って来た。

授業や昼食など二人でいることが多くなった。不思議と彼女と一緒にいると心地好かった。余り者同士、やはり氣質が似ているのであろう。

黄金週間が近附くと、学内の浮ついた雰囲気も落ち着いたように見え
てきた。ソメイヨシノはすっかりと葉桜になり、八重桜が見ごろを迎え
ようとしている。

私はその桜を無為に見ていた。

「ちよつと、由香里さん、聞いている?」

「あ、ごめん、ぼうつとしていた」

「もう、早く行こうよ」

彼女に引つ張られるように、後を着いていく。

すれ違った女性に挨拶をした。

「先輩、こんにちは」

その女性にはつこりと笑った。艶やかな黒髪が陽光のもと映えていた。
その先輩はたくさんのプリントを抱えていた。瞥見すると「言葉に関す
る調査」といった文字が見えた。所謂ゼミ生なのだろう。

「近藤さん、こんにちは。次も授業?」

「はい、そうです」

「そう、頑張つてね」

それで二人の会話は終わった。その先輩は私にも目礼してきたので、こ
ちらも簡単に会釈し返した。別れ際に彼女も私に一瞬笑顔を向けてきた。

「お知り合い?」

「うん、寮の学生代表の黒田先輩、色々とお世話になっているんだ」

「そうなんだ」

「それより、急ごう」

「あ、うん」

今日の最後の一コマが終わった。授業終了直後の独特の騒々しさの中、
私は逡巡していた。

「どうしたの?」

私は頭を振って、

「ねえ、もうすぐゴールデンウィークだけど、映画見に行かない?」

「映画?」

「うん、そう」

「どの映画なのかな」

そこで私は映画名を告げた。新作で封切られる恋愛映画である。

「私で良いのなら、喜んで」

七海は照れ笑いをしながら応えた。

「いつの日がいいかな」

「いつでもいいけど……」

私はしばしの間考え込んだ。どうせ明日、明後日のチケットは大方売
り切れだろう。

「じゃあ、しあさつてでいいかな。しあさつての午前十時、学園前駅の

東口で待ち合わせ」

「しあさつての午前十時、学園前駅の東口、うん、わかった」

大学の最寄駅を待ち合わせ場所とした。日時を伝えて、私は七海と別
れた。その足で映画館に向かって、しあさつての予約券を買っておいた。

三日後、暖かい日だった。

柔らかな風が通りを駆け抜けるたびに、私の前髪が揺れ動いた。

約束の時間の三十分前に来てしまった。少し早すぎたようだ。わかり
やすい位置に立ち、通りを行き交う人から、七海の姿を探し出す。そこ
で私は頭を振った。三十分前だ。居るわけがない。

十分前、五分前、時計を見る頻度があがっていったのが自分でもわか
る。何をやっているんだろうと自嘲した。

約束の時間になった。私はもう一度周囲を見廻した。相変わらず通り
を行き交う人々の姿は絶えるわけがなく、むしろ増えてきている。

「どこだろう」

独語した声は喧騒の中を無為に漂った。

少し待つ。一分が妙に長い時間であるように感ぜられた。

五分が経った。

「間違えた？」

自分で伝えた日時なのに、自分が勘違いしたのだろうか。病気なのか。
様々な疑問が浮かんで消えた。

「そうだ、電話しよう」

駅の公衆電話ブースのところまで行く。受話器を持ち上げて、ダイヤ
ルしようとしたところで手を止めた。

「番号、知らない」

寮に入居していない自分が寮の番号を知るわけがない。

私は再び辺りを見廻した。やはり、七海の姿は見えない。

しばしの間逡巡した後、私は女子寮へと向かった。

大学隣に併設せられている女子寮は小ぢんまりとした体裁であった。

関係者以外立ち入り禁止の文字を見て、一瞬足を止めたが構わず入る。
部屋割表を見て、七海の部屋を探す。一階の突き当りであった。

足音を立てぬようにそこまで進む。ドアの前に立って、少し深呼吸を
して軽くノックをした。

「はい」

ドア越しから快活な声が聞こえて来たことに思わず拍子抜けした。

そして、ドアが開いた。七海は私の姿を見るなり、きよんとした顔
を浮かべる。

「あう、由香里さん、どうしたの？」

軽く頭が血が昇った。

「約束忘れたの？」

「約束って、映画見に行くの明日じゃないの？……」

七海の顔がやや青ざめたのがはつきりとわかった。どうやら完全に勘
違いしていたらしい。

「今日だよ！」

強い口調で迫ると、七海はますます困惑した顔を浮かべた。

「今日？ 嘘、でも、由香里さん、言ったじゃない、三日前にしあさつ
って」

「しあさつては今日だよ。何言っているの」

「違うでしょう。しあさつては明日じゃあ——」

「ちょっと、待ってよ——」

「そこ、寮の中で騒がない」

険とした声音が私達の声を遮った。

「あ、黒田先輩」

七海に遅れるようにして、私もその声の主を見定めた。先日、少し顔
を見た寮の学生代表だった。

「二人とも、喧嘩は止してくれるかな」

黒田先輩は先程の口調とは転じて落ち着いたものとなった。私達が訳
を話すと、先輩は急に笑い始めた。

「何がおかしいんですか」

先輩は笑い顔を引っ込めないまま、

「いや、笑ってごめんね。でもね、授業そのままの事例に出会えたもの
だから」

まだ訳がわからない。二人揃って、きよんとした顔をした。

「はい、高町さん。明日、明後日、では、その次の日と次の次の日は何と言う？」

「え……しあさつて、やのあさつて」

「黒田先輩、ちょっと待ってください。やのあさつて、しあさつてじゃないんですか」

「近藤さん、出身は確か小田原の近くだったわよね」

「はい、そうです」

「高町さんはずっと東京住まい？」

「ええ、そうです」

黒田先輩はにっこりと笑った。

「言葉つて奥が深いわね。しあさつてとやのあさつては方言なのよ」

「え、そうなんですか」

七海が信ぜられないという顔をしている。私も同じような表情を浮かべているだろう。

「ええ、西日本では伝統的にしあさつて、やのあさつての順番で言うけど、東日本ではやのあさつて、しあさつての順番。でも、東京だけはしあさつて、やのあさつての順番なのよ。少し地域が違うだけでこれだけ違うものよ」

私は単にしあさつてとしか言わなかった。私は三日後の意味でそれを言った。しかし、七海はそれを四日後の意味で諒解したのだ。

「もうわかったかな」

私達は頷いた。

「はい、それじゃあ、仲直りということだ」

「七海、ごめんね。ちゃんと日付で言えば良かった」

「由香里さんは悪くないよ」

「あなた達はどこに行くつもりだったの？」

「映画です。でも……」

私は予約券を取り出した。上映時間指定の予約券である。今から行ってももう間に合わない。

「ああ、それね、ちょっと待ってね」

黒田先輩は自分の部屋に行ったようであった。そして、すぐに戻ってきた。

「あげるわ」

渡されたのは見ようとした映画の招待券であった。ちょうど二枚ある。

「いいんですか」

「いいの、いいの。映画研究会の友人からもらったものだけど、私はあまり映画を見ないし」

「ありがとうございます」

私は深々と頭を下げた。

「でも、それ日付指定なのよね」

日付を確かめた。三日後にしか使えないものであった。

「ねえ、しあさつてにね、今度こそ映画見に行こう」

人に見られていると妙に恥かしい。私は赤面しながら一枚を七海に手渡した。

七海もどことなく赤面しつつも天使然とした笑顔で、

「わかった、やのあさつてだね」

〔著者註〕その後の人口流入により、東京方言と周辺の方言が融合して誕生した首都圏方言が南関東では支配的になり、伝統的な方言は完全に衰退した。